

ルーマニア語の否定表現 —他のロマンス語と比較しつつ—  
 Expresiile Negative ale Limbii Române — în comparație cu alte limbi romanice

倍賞 和子  
 Kazuko BAISHO

はじめに

「ルーマニア語の否定表現」について発表した際、他のロマンス語ではどのようになっているのか、非常に初歩的な疑問を抱いた。幾つかの言語については、少しは勉強したことがあるといっても、「さて、このような場合どう言うのだろう」という疑問には、ほとんど答えられないと言う「薄学」振りに愕然とするだけだった。そこで、この機会に、各言語の専門の先生方のご教示を受け、ルーマニア語の否定のどの点がどの言語と似ているか、どの点は似ていないか等比較してみることにした。比較の対象は、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語に限ることとする。

1. ロマンス諸語の否定の答えと動詞を否定する副詞

ここで、否定の答えというのは、日本語の「いいえ」に当たるもので、その対極に、日本語の「はい」に当たる肯定の答えがある。動詞を否定する語とともに副詞に分類されている。動詞を否定する語と区別するため、間投詞的否定詞も考えたが、もっと平易な呼称として、肯定の答え、否定の答えとしてみた。

日本語の「はい」に当たる肯定の答えはロマンス諸語では非常に多彩である (da, sí, sì, sìim, oui) のに対し、この「いいえ」に当たる否定の答えは互いに類似している。同じ語源に容易にたどり着くことができる。また、同じ語が動詞を否定する場合にも用いられる言語もある。動詞を否定する際違う語を用いる言語でも、否定の副詞と否定の答えは非常によく似ているので、どちらがどっちだったか紛らわしくなるほどである。下に、5言語の否定の答えと動詞を否定する副詞を示す。

5言語における否定の副詞

	rom	sp.	port.	fr.	it.
否定の答え	Nu	No	Não	Non	No
動詞を否定	nu	no	não	ne...pas(ne...jamais)	non

ロマンス諸語における動詞の否定の仕方は、英語と比べると全体に非常に単純だと言える。大体英語を勉強し始めて、最初の挫折が、否定文と疑問文の複雑さにあるような気がするが、その原因は don't や doesn't のように not をつけるだけで済まないものが出現するからである。ロマンス諸語では、上の表のように、否定の答え (つまり「いいえ」に当たる) と動詞を否定する副詞が同じものが多く見られる。また、文が本動詞だけで構成されている場合も、助動詞が使われ

ている場合も同様に否定詞を前（代名詞の弱形がある場合はその前）に置くことで否定文ができるなど、動詞か助動詞か、どんな動詞かを考えなくてはならない英語と比べるとはるかに単純である。その内で、否定の答えも動詞を否定する副詞も同じ形をしていて、さらに動詞の前に否定の副詞をおくだけで否定文を作るという非常に簡単なものが、スペイン語、ポルトガル語そしてルーマニア語である。次に、動詞を否定する副詞と否定の答えは違うが、動詞を否定する副詞を動詞の前につければよいのがイタリア語である。ne ... pas、ばかりでなく ne ... jamai, ne ... point 等の語句で否定するフランス語が、文脈の中で一緒に使う語によって、ne だけでよいのか、pas も必要なのか、それとも pas は使ってはならないのかなど迷う要素が多い分、他の言語より複雑と言えよう。

「いいえ、私は学生ではありません。」「渋谷へ行きません。」「いいえ、私は彼を見なかった。」という内容を表現する各語の例を挙げてみよう。

	「いいえ、私は学生ではありません」	「私は横浜へ行きません」	「いいえ、私は彼を見なかった」
rom,	Nu, nu sunt student.	Nu merg la Yokohama.	Nu, nu l-am văzut.
sp,	No, no soy estudiante.	No voy a Yokohama,	No, no le vi.
port.	Nao, não sou estudante.	Não vou a Yokohama.	Não vi, não./Não. não o vi.
fr.	Non, je ne suis pas etudiant.	Je ne vais pas à Yokohama.	Non, je ne l'ai pas vu.
it.	No, (io) non sono studente.	Non vado a Yokohama.	No, (io) non l'ho visto.

## 2. 否定の疑問文に対する答え

再び、日本語以外の言語として初めて英語を学習したときの戸惑いを思い出してみよう。否定の疑問に対する答えである。日本語では「質問者の言うとおりでである」という意味で「はい」と言い、「質問者の言うことに反して」という意味で「いいえ」という。そこで「あなたは学生ではないのですか。」という問いの答えとして、「はい、学生ではありません。」か「いいえ、学生です。」と言うのが普通である。これに対する各語の対応文を示すと、

	「あなたは学生ではないのですか」	上「いいえ、学生です。」	下「はい、学生ではありません」
rom.	Nu sunteți student?	Ba da, sunt student.	Nu, nu sunt student.
sp.	¿No es usted estudiante?	Sí, soy estudiante.	No, no soy estudiante.
port.	Você não é estudante?	Sou, sim.	Não sou, não

- |     |                                      |                               |
|-----|--------------------------------------|-------------------------------|
| fr. | Est-ce que vous n'êtes pas étudiant? | Si, je suis étudiant.         |
|     | N'êtes-vous pas étudiant?            | Non, je ne suis pas étudiant. |
| it. | (Tu ) non sei studente?              | Si, (io) sono studente.       |
|     |                                      | No, (io) non sono studente.   |

学生であると答えたいとき、ルーマニア語とフランス語以外では、肯定の問いで聞かれた場合の答えと同じに、*sí* や *si* や *sim* を使っている。ルーマニア語では、*Ba da* と言い、フランス語では *Oui* でなく *Si* が使われる。「言うまでもなく」とか「もちろん」というように、肯定の答えの前に発する語句はルーマニア語以外にもあるようである。例：sp. *iclaro que sí! i como no!* ルーマニア語にも別に *cum să nu*「もちろん」のような表現がある。しかしルーマニア語の *Ba da* の中の *Ba* のように一語で「そうではなくて」と言う気持ちを表すことができ、同時に、日本語の発想では「いいえ」というのに、肯定の答えを使用するというためらいの気持ちを吸収してくれる単語はない。ルーマニア語を話すとき、この *ba* の存在は実に有難いものである。この *Ba* は、ブルガリア、セルビア、ウクライナ、ポーランド語の *ba* と関係があるとの記述から考えると、スラヴ語起源と考えられる。ブルガリア語では、例えば「仕事が終わったか」という問いに対し「*Ba*, まだ終わっていない、」のように使うと言うことである。とすると、ルーマニア語の *Nu* に対応する。ルーマニア語でも古く *Nu* と同じような働きをする *Ba* が見られたということだから、同じものと見てよいだろう。

その他の言語では、フランス語で肯定文の問いに対して肯定文で答えるときには *Oui* を使うのに対し、否定の問いに対して肯定文で答えるときは *Si* を使うのも、*Oui* とは違う内容を表現したかったからであろう。他の、ポルトガル語、スペイン語、イタリア語では、*Sim* や *Sí* や *Si* のように、肯定の問いに対する肯定の答えと同じである。ルーマニア語で *Nu sunteți student?* 「学生でないのですか。」 \* *Da, sunt student.* のような *Ba* のない *Da* で始まる肯定の答え方が許容されるか、とネイティブスピーカーに尋ねたところ、「外国人留学生等が使っているがルーマニア語としては、正しくないし、自然でない」ということだから、この *Ba* の使用はほぼ必須である。*Ba* が使われなくても、不自然でない例として次の文を挙げた。“*Nu sunteți student?*” “*Da, sunt student, dar mai lucrez și la magazin că am nevoie de bani.*” 「学生ですよ。だけど、お金が要るので店でも働いています。」この文では、学生であることを強調するより、「学生だけど」「働いている」ことを伝えたいのであり、「学生だけど」の部分が譲歩を示すような働きをしていることがわかる。

否定の仕方として、相手の言ったことを基準とするか、答えようとしている自分の存在や行動を基準にするかは言語によって異なる。これを突き詰めるには、長い間その言語を話している

民族の哲学的思考まで考慮しなければならないだろう。ロマンス語以外の言語や、インド・ヨーロッパ語族以外の言語も参考にしなければなるまい。

### 3. 否定の問いに対する否定の答え

否定の問いに対して、いきなり "Da" という肯定の答えで答えるのに抵抗するルーマニア語でさえ、否定の文で聞かれて否定で答えるとき、普通は即座に "Nu" が出るようである。決して「あなたがおっしゃるとおり」の意味で "Da" とは言わない。日本語の話し手である私としては最初はひどく抵抗があったものだ。「あなたの推測するように」という気持ちはどうやって表現するのかとの問いに対して、「教養があって、文にこだわる人ならば、次のように答えるだろう」とのことである。しかし Nu で始まる文が普通の答えであることに変わりはない。

N-ai fost ieri la meci? 「試合には行かなかったんだね。」

După cum ai ghicit foarte corect, n-am fost. 「お見通しのとおり、行きませんでした。」

Deci n-ai găsit cameră la hotel? 「つまり、部屋はみつからなかったんだね。」

Exact cum m-ai întrebat, n-am găsit. 「おっしゃるとおり、みつかりませんでした。」

先の例で見ると、否定の問いにたいする否定の答えは、五つの言語ですべて否定の答え（つまり「いいえ」）で始まる。「はい」と答える日本語の話し手としては、ルーマニア語の Ba da でほっとしたのも束の間、ロマンス語もまた英語と同じ外国語であるという事実を突きつけられることになるのである。

### 4. 二重、三重否定

英語で I saw nothing. Nobody said so. I went nowhere.

のように、代名詞や副詞で否定している文を見ると動詞が肯定形であることに違和感を感じたものだが、ルーマニア語ではいくつ否定の要素が使われても動詞を否定形にするという点で非常にわかり易い。他のロマンス語の例と比べて見よう。

- rom. a) N-a venit nimeni. (誰も来なかった。)  
b) N-am văzut nimic. (私は何も見なかった。)  
c) Nimeni n-a văzut nimic. (誰も何も見なかった。)  
d) Cu ea, n-am fost nicăieri, niciodată. (彼女とはどこへも一度も行ったことがない)
- sp. a) No ha venido nadie. a)' Nadie ha venido.  
b) No vi nada. b)' Nada vi.  
c) Nadie ha visto nada.

- d) Con ella no fui a ningún lugar ni una vez.  
 a) および b) の方が否定の度合いが強いということである。
- port. a) Não veio ninguém. a)' Ninguém veio.  
 b) Não vi nada. b)' Nada vi.  
 c) Ninguém viu nada.  
 d) Com ela não fui a nenhum lado a nenhuma vez.
- fr. a) Personne n'est venu.  
 b). Je n'ai rien vu.  
 c) Personne n'a rien vu.  
 d) Avec elle, je ne suis jamais allé nulle part.
- it. a) Non è venuto nessuno. a)' Nessuno è venuto.  
 b) (Io) non ho visto niente.  
 c) Nessuno ha visto niente.  
 d) (Io) con lei non sono mai andato in nessun posto.

上の例に見られるように、否定の代名詞が使われているとき、動詞も否定にするのか、する必要がないのかを判断するのは容易ではない。しかし例に見る限りでは、動詞を否定形にしてはならないことはなさそうだ。英語と違って、ロマンス語は一般に多重否定に違和感がないようである。フランス語の *ne... pas, rien* とい形の否定そのものが二重否定といえるであろう。しかしそのフランス語で書かれたルーマニア語のマニュアルの中に、「・・・(否定詞)を使った場合も動詞を否定形にするのを忘れないように」と書かれているのを発見して、上には上があると感心したものだ。ルーマニア語だけが、否定詞が何個つこうとも、動詞を否定形にするという点で選択の幅がなくなり、その点では非常に簡単だということになる。否定の意味の単語を並べた場合も、その後に「・・・ない」と否定する日本語の話し手である私としては、ルーマニア語のこの簡潔な法則性にはほっとさせられることが多い。

#### まとめ

以上から、ロマンス語の否定表現に共通のもの、特定の言語、とりわけルーマニア語に特殊なものを次のように纏めて見た。

- 1) ロマンス語の否定形は動詞の前（助動詞のある場合はその前、代名詞の弱形を目的語にする場合はその前）に否定の副詞をつける点で共通である。
- 2) 否定の答え、つまり「いいえ」に当たるものと、動詞を否定する副詞が同じ形である点でルーマニア語はスペイン語、ポルトガル語と似ている。

3) 肯定の答え（「はい」に当たる）、が肯定の問いに対するときと、否定の問いに対する時で違うと言う点では、ルーマニア語はフランス語に似ている。似ているといっても、歴史的影響関係によるものでないことは上に述べたとおりである。また、他のロマンス語では肯定の問いに対する答えと否定の問いに対する答えが同じである。否定の問いに対して肯定の答えをする際、肯定の問いに対するのと違った答え方をするというのは、特に奇異な発想ではなく言語一般の表現法中の一つであると私は考えるので（私が日本語の話し手であるからでもあろうが）、そのような言語が存在することは別に不思議でない。ただ、スラヴ語の影響とほぼ断定できるルーマニア語とは異なり、フランス語で周囲の言語と違ってこの用法が定着したきっかけが何であったかは追求する価値があろう。

4) 否定の問いに対する否定の答えは、日本語では「はい」となるが、5言語すべてで否定の答えで始まる否定文である。

5) 多重否定はロマンス語では普通に見られる現象である。フランス語は *ne* だけで否定文が作れず、*pas* や *jamais* , *rien* 等否定語を伴うので、元々二重否定と言える。他のロマンス語でも否定語（副詞や代名詞）を伴った上で動詞を否定する文は普通に見られる。否定代名詞が主語のような場合、多くのロマンス語では動詞を否定形にしないで文が完成する。ラテン語も同様である。ただし、フランス語では *ne* が必要であるし、ルーマニア語では動詞も否定形にしなければならない。「、、ない。」という否定形を使用している日本語の話し手にとっては、迷わないので楽である。

以上のことを表で示すと下のようになる。

	否定の答え	文の否定	肯定の問いの肯定の答え	否定の問いの肯定の答え	否定の問いの否定の答え	多重否定の際動詞の否定
rom	Nu	Nu	Da	Ba da	Nu	○
Sp	No	no	Sí	Sí	No	○ ×
port.	Não	Não	Sim	Sim	Não	○ ×
fr.	Non	Ne...pas 等	Oui	Si	Non	○
It.	No	non	Si	Si	No	○ ×

○ × において、○ は動詞を否定すること、× は否定しないこともあることを示す。

6) 対話における否定には、質問者の質問する際の姿勢を否定する場合、つまり相手との関係において否定する場合と、あくまで、回答文の形式に沿って否定する場合があるようだ。日本

語は相手との関係において、肯定、否定が行われるが、英語は後者である。そしてこの点に関しては今回の質問に答えて頂いた中からは、どのロマンス語も英語と同じであることがわかった。

7) ルーマニア語の Ba da に見られる「いや、そうではなくて」というような、否定の問いに対する肯定の返事の仕方は、日本語の話し手にとって、自然に受け容れられる。フランス語の Si も Oui と違う表現を使うと言う点で納得がいく。他のロマンス語にも似たような用法が見られることを半ば期待しながら質問したが、残念ながら見当たらなかった。

8) 否定の問いに対して、いささかの躊躇もなく Nu と否定する点は、ルーマニア語も他のロマンス諸語や英語と同様、返事の文の形式に基づく論理的な否定の仕方をする言語と言える。

9) 以上見たように、ロマンス語の否定形は簡潔で、互いに類似していることがわかる。本質的にラテン語の特徴を受け継いでいる。長年この特徴が失われなかったのは、簡潔性によるものだろう。

10) 他のロマンス語と違うフランス語の Si とルーマニア語の Ba da については、その歴史についていろいろな観点から調査、考察をする必要がありそうだ。

大体以上が本稿を纏めて得た結論と言える。

#### おわりに

本稿を纏めるに当たり、各言語の否定の問題についてのみならず、浅学の筆者がそれぞれの言語を理解するのに必要な多くの質問も含めてアンケートさせて頂きましたところ、懇切丁寧にお答えいただきました 姉齒栄子、伊藤太吾、黒澤直俊、鈴木信五諸氏、および、ルーマニア語のネイティブスピーカーとして、Ba da を中心とする問いにお答え頂いた田中ガブリエラ氏に心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

Dicționarul explicativ al limbii române, Ediția a II-a, Univers Enciclopedic, ,1996

「ルーマニア語詳解辞典」

Gramatica Limbii Române 1, 2, Editura Academiei Republicii Populare Române,

「ルーマニア語文法」

București ,1963

Istoria Limbii Române, Volumul I, Volumul II, Editura Academiei Republicii Socialite

「ルーマニア語の歴史」

Române, București ,1969

Formarea Cuvintelor în Limba Română, Editura Academiei Republicii Socialiste Române,

「ルーマニア語における単語の形成」

,1978

「英語の否定表現」 Otto Jespersen, Hans Marchand 著 渡辺 茂訳述 研究社 ,昭和 36 年